

二〇〇四年一月二日

主を愛する人々に恵みが(八)

エペソ人への手紙六章二一節～二四節

これまでエペソ人への手紙六章二四節に記されている、

私たちの主イエス・キリストを朽ちぬ愛をもって愛するすべての人の上に、  
恵みがありますように。

という祝福のことばについてお話ししてきました。新改訳で「朽ちぬ愛をもって」訳されていることばは、直訳では「不死(不滅)にあつて」となります。そして、このことばは、「恵み」とともにパウロが祈り求めている「不死」あるいは「不滅」という祝福を表しているとともに、この「不死」あるいは「不滅」が「恵み」と相互に関連していることを示していると考えられます。

この「不死」あるいは「不滅」と「恵み」が相互に関連しているということはどのようなことでしょうか。エペソ人への手紙全体を貫いているのは御子イエス・キリストにある父なる神さまの「恵み」ですが、その「恵み」は永遠に変わることがない「不滅」の「恵み」です。し、突き詰めていきますと、私たちを「不死」あるいは「不滅」な状態にしてくださいることに現れてきます。そして、「不死」あるいは「不滅」は、父なる神さまの愛に基づき一方的な「恵み」によつて私たちに与えられている祝福です。このように、父なる神さまの愛に基づき一方的で「不滅」な「恵み」は、最終的には、私たちがイエス・キリストによつて「不死」あるいは「不滅」な状態にしてくださいることに現れてきます。

この「不死」あるいは「不滅」は、ことばとしては「死なないこと」あるいは「滅びないこと」を表していますので、どちらかというところ消極的なものであるような気がします。けれども、これは、これまでお話ししてきましたように、終りの日に栄光のキリストが再び来られて、ご自身が十字架の死と死者の中からよみがえりによつて成し遂げられた贖いの御業に基づいて再創造される、新しい天と新しい地にあるものの特性です。そして、それが主の契約の民である私たちに当てはめられるときには、充滿な栄光に満ちたいのちにある状態を意味しています。それは、私たちの契約のかしらであられるイエス・キリスト

が十字架の死に至るまで父なる神さまのみこころに従いとおされたことに対する報いとして受け取ってくださったいのちです。

この充滿な栄光に満ちたいのちが永遠のいのちです。そして、これが充滿な栄光に満ちているのは、このいのちを与えられた者が神さまの栄光のご臨在にこの上なく近づくことができるようになるためのことです。私たちはそのようにして、被造物の限界の中でのことではありませんが、父なる神さまの栄光のご臨在の御許に限りなく近づいて、父なる神さまの御腕に抱かれて、愛にあるいのちの交わりを享受するのです。「不死」あるいは「不滅」という祝福は、このような状態にあることを意味しています。

このことのために必要な御業は、イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによって、すでに終わっています。ですから、イエス・キリストは、今、ご自身が成し遂げられた贖いの御業に基づいてお働きになる御霊によって、私たちの罪をきよめてくださり、私たちをご自身の復活のいのちによって生かしてくださいました。そのようにして、私たちをご自身の契約の民としてくださって、ご自身のからだである教会に加えてくださいました。そして、このことを、新しい契約の礼典である洗礼と主の晩餐によって保証し、その恵みと祝福を常に私たちに注いでくださっています。

このようにして、すでに私たちの間で始まっているイエス・キリストの御霊によるお働きは、終りの日に再び来られるイエス・キリストが造り出される「新しい天と新しい地」において完成します。その「新しい天と新しい地」においては、神さまがご自身の契約によって約束されたすべての祝福が完全な形で実現します。その祝福中心は、そこに神さまの充滿な栄光のご臨在があるということです。そして、私たちは神さまの充滿な栄光のご臨在の御許に住まうようになり、神さまとの愛にあるいのちの交わりのうちに生きるようになりま。それによって、神さまのご臨在の御許からあふれ出る祝福が永遠に私たちを満たしてくださいるようになります。それが「不死」あるいは「不滅」な状態にあることが完全な形で実現することです。

\*

繰り返しの引用になりますが、そのような「不死」あるいは「不滅」が完全な形で実現するようになる終りの日のことを記している黙示録二一章一節〜四節には、

また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去

り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下つて来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすつかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しきもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」と記されています。

すでにお話ししましたように、三節に記されている、

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。

という「御座から出る大きな声」は、神である主がご自身の契約において約束してくださった祝福の中心にあることが実現していることを告げています。その祝福の中心は、神さまがご自身の民である私たちの間にご臨在してください、私たちは神さまの民となり、そのことにかかわる特権にあずかるようになるということです。

このことは、「聖なる都、新しいエルサレム」のことが一六節で、

都は四角で、その長さと同幅は同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。

と言われていることにも示されています。新改訳欄外注には「一スタディオンは一八五メートル」と記されています。ですから、「一万二千スタディオン」は二二二万メートル、すなわち二二二〇キロメートルということになります。これは面積にして四九二万八千四〇〇平方キロメートルになります。日本の総面積が三七万七千八四七平方キロメートルだそうですから、とてつもなく広いものであることが分かります。そればかりでなく、この「都」には高さもあつて、それが「一万二千スタディオン」すなわち二二二〇キロメートルであると言われています。そのような高さの都市というものはあり得ません。もちろん、この「一万二千スタディオン」は比喩的な数字で、一二節〜一四節に繰り返し出てくるイスラエルの一二部族や一二人の使徒たちと関連する「一二」という完全数と「千」という多いことを表す完全数を掛けたものです。これによって、完全に主の契約の民のすべてが住まうのに十分な寸法であることを示しています。

そして、

都は四角で・・・長さも幅も高さも同じである。

ということは、それが、主の神殿の至聖所であるということを示しています。主の神殿の至聖所は主の栄光のご臨在のあるところですが、「聖なる都、新しいエルサレム」は何よりもまず、主の充滿な栄光のご臨在のある所、そこに栄光の主がご臨在される所であるのです。

\*

二節には、

聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来る

と記されています。この「新しいエルサレム」は「夫のために飾られた花嫁のように整えられて」と言われています。また、九節ではこの「新しいエルサレム」のことが「小羊の妻である花嫁」と呼ばれています。

このことから、「新しいエルサレム」が何であるかを理解することができます。というのは、聖書の中では、夫と妻の関係は、一貫して、主とその民の契約関係にたとえられているからです。夫と妻の関係の始まりは創世記二章一八節～二五節に記されています。その結論部分に当たる二四節には、

それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

と記されています。これを受けて、エペソ人への手紙五章三一節、三二節には、

「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」「この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

と記されています。

このことから分かりますように、黙示録二一章二節に記されている「夫のために飾られた花嫁のように整えられて」といる「新しいエルサレム」は、新しい契約の共同体であり、キリストのからだである教会のことです。

そうしますと、二節で、

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

と言われている「新しいエルサレム」は、人のいない空っぽの町ではありません。すべての主の契約の民によって構成されているキリストのからだである教

会です。そして、三節に、

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。」と記されているように、そこには充滿な栄光に満ちた神である主のご臨在があり、主の契約の民はすべてその御前にあって、神さまとの愛にあるいのちの交わりに生きています。

先ほど、一六節に、

都は四角で、その長さと同幅は同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。

と記されていることから、「新しいエルサレム」は何よりもまず栄光の主がご臨在される至聖所であるということをお話ししました。この栄光の主がご臨在される至聖所の本体である「新しいエルサレム」には、すべての主の契約の民が住んでいて、主との愛にあるいのちの交わりのうちに生きています。

\*

このことは、二節に、

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

と記されていて、「新しいエルサレム」が「神のみもとを出て、天から下って来る」と言われているので分かりにくいかもしれませんが、「神のみもとを出て、天から下って来る」のであれば、「神のみもと」を離れてしまうのではないかという気がします。しかし、これは、比喩的な表現であって、この「新しいエルサレム」の起源が天にあり「神のみもと」にあるということを意味するものです。

このことを理解するうえで助けとなるのが、古い契約の下にあった聖徒たちのことを記しているヘブル人への手紙一章一三節―一六節に記されています。そこには、

これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入ることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会があったでしょう。しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこが

れていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

と記されています。「新しいエルサレム」は主の契約の民が追い求めていた「天の故郷」であり、神さまが備えてくださった天の「都」であるのです。

黙示録二一章一節には、

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

と記されていますが、「新しいエルサレム」は「新しい天と新しい地」の中心にある都です。そして、「新しい天と新しい地」ということは「新しい天と新しい地」が神さまの新しい創造の御業によって造られたということを示しています。それは、終りの日に再臨される栄光のキリストによって再創造されるということですよ。

これは、それまでの古い天と地がご破算になってしまふのではありません。再臨される栄光のキリストは、まず、古い天と地に巣くっている暗やみの力と人間の罪とその結果生み出されたものが完全に清算されます。これが、一章と二〇章に記されている最終的なさばきによってなされます。そして、栄光のキリストは、そのように吹きよめられた天と地を、ご自身の充滿な栄光のご臨在にふさわしいものとして新しく造り変えられるのです。

ヨハネの福音書一章一節～三節に、

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

と記されていますように、永遠の「ことば」であられる御子は、「初めに」天地創造の御業を遂行されました。そして、一章一四節に、

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

と記されていますように、永遠の「ことば」であられる御子は、ご自身の民を罪と死と暗やみの力の下から贖い出してくださいるために、人の性質を取って来てくださいました。そして、十字架の死をもってご自身の民の罪を贖ってください、栄光を受けて死者の中からよみがえられたことによって、ご自身の民の永遠のいのちの源となられました。栄光のキリストは、ご自身が成し遂げられ

た贖いの御業に基づいて、罪を贖われたご自身の民が住まうべき「新しい天と新しい地」を再創造してくださるのです。その「新しい天と新しい地」の中心に

「新しいエルサレム」があります。

\*

黙示録二一章二節では、この「新しいエルサレム」が、

夫のために飾られた花嫁のように整えられて

いたと言われています。この「飾られた」ということも「整えられて」ということも受動態ですから、「花嫁」が自分でしたことはありません。では、そのように小羊の「花嫁」である教会を飾ってくださり、整えてくださるのは誰でしょうか。それは、この「新しいエルサレム」が、

夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来る

と言われていることから推測できます。「新しいエルサレム」は天において、すなわち、神さまの御許において、「夫のために飾られた花嫁のように整えられ」たのです。具体的には、父なる神さまが御子イエス・キリストによってなしてくださる事です。それは、夫に対する戒めを記しているエペソ人への手紙第五章二五節～二七節に、

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもつて、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。と記されていることから分かります。

言うまでもなく、ここで、

キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた

と言われていることは、イエス・キリストがご自身の民を罪と死と暗やみの力から贖い出してくださるために十字架にかかって死んでくださったことを指しています。

少し話がそれますが、ヨハネの手紙第一・三章一六節に、

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のため

に、いのちを捨てるべきです。

と記されていますように、私たちすべてはイエス・キリストが私たちのために十字架にかかっていのちを捨ててくださったことによって示された愛をもって互いに愛し合うように召されています。そのことは、特に、夫と妻の関係における夫に求められていることであるのです。それは、同じエペソ人への手紙五章二二節、二三節に、

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

と記されているように、「夫は妻のかしらであるからです」。「妻のかしらである」「夫は」は妻のために自らをささげるまでに妻を愛さなければなりません。それが、「かしら」である者の本来のあり方です。

ちなみに、ギリシャ語の原文では二二節で、

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

と言われているときの「従いなさい」ということはありません。二二節を直訳しますと、日本語としてはまったくおかしいのですが、

妻たちよ。主に、のように、自分の夫に。

となります。それが従うことであることは、そのすぐ前の二一節において、

キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。

と戒められていることによっています。これも先ほどの夫の場合と同じです。私たちすべてが契約の主である「キリストを恐れ尊んで」互いに従うように召されています。その中で特に、夫と妻の関係において妻はかしらである夫に従うように召されています。

いずれにしましても、二六節、二七節では、教会のかしらであられるイエス・キリストが教会を愛してご自身をささげられたことの目的は、

みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなもの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるため

であったと言われています。イエス・キリストは、すでに教会を愛してご自身をささげられました。そして、今、御霊によって、

みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなもの何一つない、聖

く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためのお働きを進めてくださっています。ですから私たちは、そのようなイエス・キリストのお働きにあずかっている者として、御霊による栄光のキリストのご臨在の御前に立って、父なる神さまを礼拝しています。

\*

これはすでに私たちの現実になっているのですが、これにはなお完全なものとなっていないという面があります。それは、パウロがコリント人への手紙第二・五章六節で、

ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。

と告白していることです。

ですから、黙示録二一章二節において、

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

と言われているのは、イエス・キリストが教会を愛してご自身をささげられたことの目的である、

みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなもの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるため

ということが完全な形で実現したことを示しています。

そのようにして、終りの日に、栄光のキリストによって、

新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられるようになることは、キリストのからだである教会が「不死」あるいは「不滅」な状態にあるものとなることを意味しています。

そして、これも、毎回の繰り返しになります。エペソ人への手紙五章二六節、二七節に記されている、イエス・キリストが教会を愛してご自身をささげられたことの目的である、

みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなもの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるため

ということが完全な形で実現するということは、エペソ人への手紙一章三節、五節に、

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

と記されている、父なる神さまの永遠の聖定において定めてくださった祝福が実現するということです。